連載

市長室からこんにちは

vol.66

益田市長
山本 浩章

50歳で老舗の当主の座を退いた伊能忠敬の悲願は、地球の大きさを知ることでした。そのためには、遠く離れた地点で北極星を観測し、その仰角を比較する必要がありました。そこで、まずは天文学を学ぶため江戸に上り、幕府天文方の高橋至時に弟子入りしました。当初、至時は隠居の道楽かと思い気乗りしませんでしたが、すぐに忠敬の熱心さと聡明さに感銘を受け、互いに尊敬しあう間柄になりました。

天文の大要を習得すると、今度は、海岸防御のため蝦夷（北海道）の地形把握が急務だった幕府に対し、地図作成を名目とする旅行の許可を願い出ました。すると費用補助は20両のみ、測量機器等は自前で準備することという条件で認められたのです。

10人の仲間とともに江戸を出立したのは忠敬55歳の春。北海道の海岸沿いをひたすら歩き、昼間は歩数を数え、方位を図り、夜になれば天体観測と記録の集計というおよそ半年間の旅は、想像を絶する苦難の連続でした。しかし、その結果、地球の大きさを確認できたうえ、幕府の期待以上に精密な北海道地図が完成しました。以後、幕府は他の方面の測量を次々と忠敬に委ねるようになります。回を追うごとに補助が手厚くなり、ついには特命事業として経費全額が支給されるようになりました。

その一方で、忠敬の老衰も進みます。71歳で第10次旅行から帰ると、残る力を振り絞り地図完成を急ぎますが、2年後無念にも道半ばで息を引き取りました。弟子たちはすべての功績を忠敬に帰すため、その死を伏せ、涙を隠して制作を続行しました。

こうして完成した大日本沿海輿地図は、後にその写しが密かに国外に持ち出されました。これを手に黒船を率いて来航した米国のペリー提督は、沿岸を試しに測量してみて、その結果が地図と寸分違わぬことに驚嘆しました。そして日本は決して侮れぬ文明国と思い知ったのです。

通算3737日間に及んだ地図作成の旅の総行程は約4万キロ。奇しくも忠敬自身が確かめた地球一周の長さに相当します。

中世益田講座　我ら、益田氏家臣団！編（全12回）

第10回　増野氏

【問い合わせ先】
市文化財課　☎31-0623

大永3（1524）年、惣大夫の増野右衛門進に対して増野藤右衛門尉が、祇園社（大谷町野坂）の領地を引き渡すことを文書で通知しています。文書を宛てられた人と出した人の名前がよく似ていますが、前者は惣大夫とあるように、当時、染羽天石勝神社（「瀧蔵権現」）、櫛代賀姫神社（「浜八幡」）など7つの神社の神主を兼ねた人物です（「原馨氏所蔵増野家文書」）。

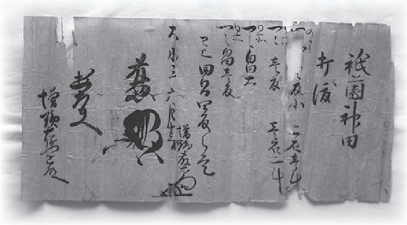
一方、文書を出した増野氏は、益田氏の家臣と考えられ、この文書には享禄2（1529）年生まれの益田藤兼の花押（サイン）があります。これは、後に藤兼が益田家を継いだ時に、祇園社の領地を追認したものです。

この益田氏家臣の増野氏は、永享7（1435）年に当時の益田氏一族と家臣ら107人が益田兼堯を当主と仰ぐことを誓った連署起請文には見えず、初めて確認できるのは文明9（1477）年に室町幕府が全国に賦課した段銭という税を徴収するため、丸孝連という人物を石見に派遣し、これを益田兼堯が接待したときです。

このとき、増野彦右衛門尉が接待の役目を務めており、それは彼が「乙吉役人」（乙吉の年貢収納を担当か）だからとされています。

天正5（1577）年以降、増野護吉という人物が活躍します。彼は藤兼・元祥の側近的な存在として活動しており、その活動内容は実務的なものでした。最もそれが端的に表れているのが、天正19（1591）年の益田氏領での検地結果の通知を益田左衛門進と行なっていることです。

増野氏は、もともとはそれほど有力な家臣ではなかったと思われますが、実務能力に長けていたことで、益田氏当主の側近として抜擢されたと考えられます。戦国の世から近世へ移行しつつあったこの時期、槍働きよりも実務能力が求められていたのでした。



「原馨氏所蔵増野家文書」の増野藤右衛門尉打渡状。一番左の2行分が宛名、左から3行目が益田藤兼の署名と花押、左から4・5行目に年月日と増野藤右衛門尉の署名と花押。